

---

# 遊☆戯☆王F

河持 翔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊☆戯☆王F

### 【Nコード】

N5140X

### 【作者名】

河持 翔

### 【あらすじ】

異なる時間、異なる歴史、異なる物語の始まり…。

## まず初めに

…崩壊する景色、失われていく理想郷、……あの日、世界は堕ちた。  
……どうもはじめまして、うp主です。この小説は私の処女作となるものです。文章の稚拙さが目立つと思いますが、そういったものも含めて最後まで読んでくれたら幸いです。小説内では、多数のオリジナルキャラクター、オリジナルカードが登場する予定です。また読者からのアイデアも積極的に取り入れていきたいとも思っております。また当作品では一部過激な内容のものも出す予定ですの  
でご了承ください。

## ユウトウ1 神の消失（前書き）

ここから本編です。

## ユウトウ1 神の消失

side 神の目

デュエルモンスターズ、通称デュエル、I2（インダストリアル・イリュージョン）社より生み出されたこのカードゲームは、瞬く間に世界中に広まり、チェスやランプ等のメジャーゲームに匹敵する競技人口とワールドカップをものぐ人気を集めた。世界規模での大会を行う施設、デュエルモンスターズ専門の学校等様々デュエルに関する建物が建設された。デュエルは人々の歴史に大きく、そして新たなページを書いたのである。

しかし、そんなデュエルに誰もが予期せぬ事態が起きた。

20XX 8月上旬、I2社本社が突如謎の爆発を起こし、崩落した。

日本、アジアの中でも中国、インドと肩を並べる経済力を持ったこの国のとある港町、太平洋に面しており国外から様々な物資が行きかうこの町では現在通勤ラッシュの真っ只中だ。現在の時刻は8時10分、この町で最も激しい時間帯だ。港からおよそ800m離れた駅では、駆け込み乗車はくとか、降りる人をく等と駅員の声がスピーカーを通して常に鳴り響いている。騒がしいといえばそれまでになるが平和？な日々だ。

駅から少し離れたところには中学校がある。波風第五中学校、生徒数461人クラスは1年A組、1年B組とアルファベットで数え、

毎年学園祭や体育祭を開き、時々地域に貢献した運動もするごくありふれた公立の学校である。そんな学校の正門からはなんというか：右手で竹刀を持ち、黒のジャージを来たなんとも古典的なかわもて顔の体育教師が、オラア、もうすぐ予鈴がなるぞ！…つとどなっていた。周りの生徒は小走りで校内へと入っていった。そんな周りがあわてている中、唯一人、学校指定の鞆を右肩で担ぎ、制服である学ランの上2つのボタンをあけ、目を半開きにし下を向いたままゆっくりと歩く少年がいた。

「オイ！そのお前、なにちんたら歩いてる！さっさと教室に行けエ！」

「…ああ、わかりました」

少年は少し間をあけてから、体育教師を睨みそういった。

「ツチ、なんなんだアイツ」

体育教師は吐き捨てるようにいった。

4月下旬の現在、今年入学した1年生はそのほとんどが自分たちの入部する部活を決めており、すでに入部希望の用紙を提出した者も少なくはない。そんな1年生の教室の一つである1年A組の町の景色が見渡せる窓のすぐ側の席で先ほどの少年は本を読んでいた。

「…」

そんな少年に三人の少女が近づいていた。

「…クスウ…：…た…りでいる」

「…ツソ…ヂ…友…：…いないの」

「ボッ…とか」

少年は三人の言葉を聴いてはいるが無視した。やがてしばらくすると少年は本を閉じそれを鞆に入れると少年はうつぶせになった。無視無視、そう自分に言い聞かせた、と次の瞬間、

「ウエエエエエイ」

3人のうち目が小さく垂れ下がりが学校指定のミニスカートの下に体操服である短パンをはいた少女が奇声をはっすると同時にもう一人

の本来なら校則違反であるが髪を暗い金色にブリーチした少女が先ほど自分が読んでいた本を鞆からぬきとった。

FOOOOOOOOOO

「おい！ふざけんじゃねえよ、クズども！」

するとスパッツの少女はこういった。

「オイ、フザケンジャネエヨ、クズドモオオオ」

「オオオオアアアハアア」

少年の言ったことは復唱すると再びキチガイじみた声をあげ叫びだした。

「オイ、うるさいぞお前ら、何やってる、とっとと席に着け！」

すると少年たちの担任である30代後半の女教師が若干ドスのきいた声で言いながら教室に入ってきた。三人の少女は本を少年の机に置き、女教師に、いえ別に虚淵君と遊んでただけです、とでたらめなことについて自分たちの席に座った。

S i d e  
虚淵

俺の名前は虚淵玄、某脚本家と同じ名前だが気にしないでくれ、親が某魔法少女アニメのファンだったらしいし偶然苗字が一緒で付けたらしい。「らしい」というのは俺の両親は昔とある事故で死んでいるからだ。俺もそのとき左腕を失った、だからあまりそういった件については、俺も詳しくない。

Side  
神の目

午後4時過ぎ、1年生は授業が終わり部活に入っていないものはそのほとんどが帰宅する時間だ。虚淵も特にそういったものには入

っていないため今は学校からおよそ500mはなれた自宅に帰るところだ。現在虚淵は働ける年ではないので親戚からのお金で一人で暮らしている。今日学校であったことに腹を立てながら不機嫌そうに歩いていた。っとそんな時ふとコーヒーが飲みたいと思った虚淵はポケットに入れていた財布を手に自販機をさがした。するとすぐにそれは見つかりそこへ硬貨を入れようとした、が、手が滑ったのか硬貨を落としてしまいその硬貨は運悪く自販機の下に転がり込んでしまった。

「あつ ちよつとお」

断末魔に似た声をあげながら虚淵は自販機の下に手を入れたが、硬貨はかなり奥の方にいつてしまったらしい、手では取れないと判断した虚淵は近くにあった木から枝を一本もぎ取るとそれで奥にいった硬貨を取ろうとした。虚淵の予想通り枝を使ったことは、正しかったらしくすぐに硬貨はとれた。

「はあ、よかったぜ、この前MGガンダムDX買うのに結構使ったからな」

っと安堵の声をあげているともう一つ硬貨とは違う何かがでてきた。

「…?」

それは非常に薄く身長2mあるやつの手にすっぽり収まりそうなサイズのもの、カードだ。それも唯のカードではない。デュエルモンスターズのカードだ。っとそれを見た瞬間たださえ不機嫌な虚淵の顔が陰しくなった。例えるのであれば妻を殺した犯人を目の前にした夫のような顔である

「…カード、クソッ 何でこんなDORÉIの産物が…」

虚淵はこれまでにないほどに怒り、カードを破ろうとした、が次の瞬間、

ドゴンッ

凄まじい轟音とともに突如謎の爆発、いやそれに似たなにか衝撃が



おきた。

「うあ」

凄まじい衝撃の煽りをうけ虚淵は5m程吹き飛んだ。

「…いってえ、なんなんだ」

痛みをこらえあたりを見渡した虚淵は信じられない光景を目の当たりにした。先ほど自分がいたところから少し離れたところにある道がまるで空襲にでもあったかのように抉れていたのだ。町の人々がなんだなんだとあたりを囲む中、爆発の中心に二つ人影が見えた。

「なあタップ、あいつの持っているカードなのか、HATEのカードは？」

「うん、あれへいとかーどだよ、ごーどん」

「何だって自販機の下にそんなのが」

「たぶんこのまえのかぜでとばされた」

「ずいぶんアバウトだなあ」

ゴードンと呼ばれた男、容姿は金髪碧眼で中肉中背の白人男性だがその顔と目は人の命をなんとも思わない殺人鬼に通じるものがある。そしてもう一方、タップといわれたほう、それをみて虚淵を含め周りの住民たちは驚愕した。身長2mを超える全身毛むくじやらの熊にも似た人いや、化け物がゴードンと呼ばれた男と話していたのだ。

「おい、その坊主、とっととそのカードを渡せえってアイツ英語わかるのかあ？」

「それ、おれたちのかーど」

ゴードンは少々いらだった声でいうとまるでお菓子をねだる子供のようにタップが続いた。虚淵はそこしれない恐怖と困惑を抱えながら自販機の下から見つけたカードをみた。このカード渡すべきか、でも渡したら最後自分を護るものがなくなる、そうになったら…そうこう考えているゴードンがさらにいらだった口調でこちらに歩いてきながら言った。

「だーかーら、わたせっツテンダロォ！」

もうダメだっと思ったそのとき…

リンッ

鈴や風鈴にも似た音とともに世界が止まった。

「…っな、コイツは」

「へいとのけっかい！」

side 虚淵

なんなんだよおこれ、どうなってんだよお 何で俺こんなやつらに絡まれてるんだよ、それにさっきまでみんなあんなにワーワー騒いでいたのになんでうごかなくなったんだよ あの二人だってなんか突然あわてだして、クソ、なんでこんなことに、畜生オ、あの日からなにもいいことなんてねえ

ドゴォーン

「うぁ……ゴホォ…ゴホォ…」

クソォ、今度は何だってんだよ

「よおタップ、テメェ何勝手に俺様のカード私物にしてんだぁ  
ア！！」

「ゴホ…クソッなんなんだ…うわぁ、何だこの化け物は？」

side 神の目

虚淵の前にタップとは違う別の怪物が現れた。銀と黒をベースとした2mほどの大きさの人型の怪物だ。頭部は蠨螂やクワガタに見えるくもない。

「だぐば、なんでこんなところに」

「テメェにわざわざ時間を割く必要性なんて皆無だ。」

「オイ、テメエら、何俺だけハブしてんだ。タップ、テメエの知り合いか？このゴキブリ」

「ほお 契約者の分際で俺様をゴキブリ呼ばわりとはなあ…ハハハ…ぶち殺す」

3人？とも殺意むき出しで会話をしていると、ゴードンそして、ダグバと呼ばれた怪物の左腕が光り輝いた。そしてタップがゴードンの腕から放たれる光の渦に巻き込まれ消えた。その瞬間二人の左腕になにかがくつついた。デュエルディスクだ。ソリットビジョンシステムと呼ばれる立体映像発生装置が内臓されておりディスクを通してカードに描かれたモンスターたちを作り出す。

「この結果ではデュエル以外のことは一切出来ない、そして負けたものは…死ぬ」

「そんな基礎的な知識見せびらかしてなにドヤ顔してるんだあ、役立たずの専門家ミテエで殺意がでてるぜ。」

「…ぶち殺す」

「「デュエル」」

side 虚淵

オイ冗談だろ、なんでこいつらデュエルなんてやってんだよ。あの銀色の奴はなん…

「オイ、その人間！俺様のカードになんかしたら唯じゃおかねえぞ！」

…カードって、この自販機の下にあったやつか、なんたってこんなものを…それになんなんだこのカード、見たことないカードだ、確かあいつら…HATEのカードとかいってたな…

「オイ、きいてんのかあ」

「は はい」

たかうなんであんなやつに。

side 神の目

第一ターン ・ ターンプレイヤー；ゴードン                      ・ LP；800  
0                      ・ 手札；5

「先行は俺がもらう、ドロー、俺は《切り込み隊長》を召喚！」  
中年の剣を持った戦士がゴードンの声にこたえるかのように現われた。

「さらに、《切り込み隊長》の効果発動！手札から《格闘戦士アルティメーター》を特殊召喚する」

中年の戦士が剣を振りかざすと突如砂嵐がおきその中から丸腰の戦士が現われた。

「そして俺はこの2体のモンスターをオーバーレイ！現われろ《アースクエイク・ワイバーン》！！」

二体の戦士が光の塊に変わるとゴードンの目の前に突如光の渦が出現、銀河にも見える渦に光の塊が入ると同時に超新星爆発のような輝きがおきた。そして上空に岩石で出来たような体をした腕のない巨竜が二つの光る球体を携え現われた。

《アースクエイク・ワイバーン》 当小説オリジナルカード

効果モンスター

ランク3／地属性／ドラゴン族／攻1900／守1200  
レベル3モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材1つを取り除くことで発動できる。フィールド上に表 側表示で存在する地属性モンスターの数×500ポイントのダメージを相手に与える。

「《アースクエイク・ワイバーン》の効果、オーバーレイユニット

1つを使い地属性モンスターの数×500ポイントのダメージを与える！くらえ！」

上空の巨竜から放たれる岩の雨がダグバをおそう。

「ツチ」

ダグバ      LP8000↓7500

「どうだ」

「ケッ たかが500で何威張ってんだ、初心者かテメエは？」

「調子こいてんのもの今のうちだけだぜ、カードを1枚伏せターンエンド」

「なんなんだよ」

このデュエル、虚淵は唯怯えながら見ているしかできなかった。別にゴードンのやった戦術など大して凄くない、ただこのデュエルは普通ではないのだ。

## ユウトウ1 神の消失（後書き）

はい、今回から始まった遊☆戯☆王Fいかがでしたでしょうか？まだ始めなので「契約者？」とか「HATEってなんぞや」と思っている方もいますと思いますがそれはこれから明かしていきたいと思っています。

## ユウトウ2 少年と怪物と愛（前書き）

前回の話や登場人物の名前など1部他作品のものがありませんが今後もちょうくちよく出す予定です。また元ネタとの接点は特にありません。

## ユウトウ2 少年と怪物と愛

side 神の目

I2社本社倒壊から3ヶ月後、デュエルモンスターズの関連グッズの製造及び販売権はとある企業に移された。

『KONMAI デジタルエンタテインメント』

これが後の出来事への伏線となった…

side 虚淵

「…なん…なんだよこれ」

俺は何か悪い夢でもみているのか、

「ハッ どうしたゴキブリ！俺をぶっ殺すんじゃないのか ア  
ッ」

「ぶち殺すだ初心者」

今俺の目の前では、正体不明の白黒の怪物と殺人鬼みたいな顔をした外国人がデュエルをしている。

第二ターン ・ターンプレイヤー；ダグバ ・LP；7500



・手札；5

「いくぜエ！俺のターンドロ」

「相手のフィールドにのみモンスターがいる時このカードは手札から特殊召喚できる、コイ、《サイバー・ドラゴン》」

人の頭がすっぽり入りくらの口を持った機械の竜が出現した。

「さらに手札を一枚捨て、《エレクトリック・パンサー》を特殊召喚！」

《エレクトリック・パンサー》 当小説オリジナルカード

効果モンスター

星5／光属性／獣族／攻2100／守1300

自分フィールド上に光属性モンスターが表側表示で存在しているとき、手札を一枚捨てることで手札 から特殊召喚できる。

「そして俺はこの2体のモンスターをオーバーレイ、エクシーズ召喚！コイ、《A d r e u s , K e e p e r o f A r m a g e d d o n》」

漆黒の翼を纏った悪魔が赤い結晶のような短剣を携え現れた。

「A d r e u s の効果発動！オーバーレイユニットを1つ使い《アースクエイク・ワイバーン》を破壊する」

黒い翼の悪魔が手を翳すと、巨竜の体を黒い煙が包み込みそのまま巨竜ごと消え去った。

「これで邪魔者は消えた、バトル！行けA d r e u s、タップのフンに攻撃しろ！」

「ッグワ」

ゴードン   LP8000↓5400

黒い翼の悪魔が剣を振りゴードンと呼ばれた男を切り刻んだ。

「ターンエンド、どうした？フン、傷薬が必要か？」

「…クソ…ふう…いや必要ないさ、お前のウジのわいた脳みそを治す薬以外な」

「…図にのんなよ人間」

さっきから漂うこのいやな感じ、周りの奴はなんで動かないんだ、何で俺はこんなところにいるんだ、くそ、あの時からずっとこうだ。理不尽なことの繰り返しだ。この左腕だって…俺の家族だって…

第三ターン   ・ターンプレイヤー；ゴードン   ・LP；5400  
0   ・手札；3

「俺のターンドロロー…フ…ハハハ、きた」

ゴードンがなにやら不適な笑みを浮かべている、逆転のカードを引いたのか…

「俺は《ジャンク・フォアード》を特殊召喚、こいつは俺のフィールドにモンスターがいなければ手札から特殊召喚ができる」

全体的に角ばった人型モンスターが現れた。

「さらに《キャノン・ソルジャー》を召喚」

機械でできた兵士がダグバへと砲台をむけた。

「そしてリバースカードオープン、《リビングデッドの呼び声》、墓地の《切り込み隊長》を復活させる、そして俺はレベル3の《切り込み隊長》と《ジャンク・フォアード》をオーバーレイ！現れる《インフェルノ・ガイア・モール》！」

《インフェルノ・ガイア・モール》 当小説オリジナルカード

効果モンスター

リンク3／地属性／ドラゴン族／攻2700／守1200

地属性レベル3モンスター×2

自分のモンスターがモンスター1体をリリースして効果を発動する場合、リリースする代わりにこのカードエクシーズ素材1つを取り除く事ができる。

漆黒の体をした巨大な土竜が地面を裂いて現れた。

「ガイア・モール：まさかHATEの」

怪物のようすがおかしい、HATE？さっきから何をいつているんだ？

「バトル、ガイア・モールでAdreusを攻撃、グラント・エクスプローション！」

《Adreus, Keeper of Armageddon》  
攻2600

《インフェルノ・ガイア・モール》 攻2700

巨大土竜の口から溶岩のような塊が放たれ黒い悪魔を一瞬で焼き払った。

「：ッウ」

「《キャノン・ソルジャー》ダイレクトアタック！」

「グワ」

ダグバ LP7500↓6000

白黒の怪物が膝をついた、だがゴードンは間をいれず：

「さらに《キャノン・ソルジャー》の効果発動、モンスター1体をリリースして500ポイントのダメージをお前に与える」

「…フン、だからどうした。お前のモンスターはたった二体、1000ポイントのダメージくらいどおってことない」

「1000? おいおいちょっと少なすぎるぜ、ガイア・モールはリリースするモンスターを自身のオーバーレイユニットで代用できる。」

「…何」

「さらに俺は魔法カード《グランド・チャージ》を発動、墓地の地属性モンスター2体までをガイア・モールのオーバーレイ・ユニットにする」

### 《グランド・チャージ》

#### 通常魔法

自分の墓地の地属性モンスターを二体まで自分フィールド上に表側表示で存在するエクシーズモンスターのしたに重ねる。

「オーバーレイ・ユニットが増えただと」

「いくぞ、おれは《キャノン・ソルジャー》とオーバーレイ・ユニット4つをリリース、2500のダメージをくらええええ」

機械の兵士と4つの光の球体が光るオーラのようなものをまとい怪物に迫ってきた…おいちよっとまで、球体の1つが俺の方にも…

「「ぐああああああ」」

ダグバ LP6000↓3500

「ハハハハハ、どうだこれがHATEのちからだ! 契約者のいいお前とは違うんだよお、カードを一枚伏せターンエンド」

「…クソォ…何でこんな目に」

なんか向こうでゴードンの高笑いが聴こえる…ウツ…意識が…周りの建物が壊れている…おかしいな…ソリットビジョンじゃこんなことはおきないはずなのに…

「ゲホ」

…痛い…脇から血が…ダメだ…視界もぼやけてきた…起き上がるどころか指1本動かせねえ……なんでだよ……どうしてこんなところで俺は

「ツクソ、やっぱり契約なしじゃ、ん、あの人間まさか…」

…あの怪物こっちきいている……ほくぜんしん……怪物もそんなことするのか……クソォなんで俺は

……死ななきゃならないんだよ……こんなところで……ちくしよ…  
…

「オイ、立てエ どうやらテメエには契約者としての素質があるみたいだ」

…誰だ…契約者…何のことだ

「お前はまだ生きられる。ボサットするな！」

「…お前は」

「俺様か？ダグバだ、これからお前の主になるHATEだ」

「…へ…イト」

「そうだ、説明は終わりだ早くたて」

「けどもう俺は…生きていたって…」

「そんなこと知るかあ、俺様はこんなところで死にたくはない、生きて愛を見る。それまでは死なねえ！」

…愛…か…何を言ってるんだよこの怪物は……けど…やっぱりこのまま死んだら…死んでもしにきれないよな…

「さあ早く立て、そして俺様の名を呼べ！力が手に入る」

…父さん、母さん、ごめん、俺まだそっちにはいけない。生きて…

『この腐った世界をぶっ壊す…』

「ダグバアアアアアアアアアアアア」

Side 神の目

その瞬間、1人の少年とHATEの物語の幕が切って落とされた…。

## ユウトウ2 少年と怪物と愛（後書き）

ついに二人？がまともな会話をしました遊☆戯☆王F。これからどんな展開を見せていくのでしょうか。というわけで今回はここで筆をおろすことにします。

### ユウトウ3 決着と悲鳴と新たな影（前書き）

デュエル内容の表記の仕方やキャラの口調が安定しません。



### ユウトウ3 決着と悲鳴と新たな影

side 神の目

止まった世界で二人、いや、1人と1台は会話をしていた。

「あーあ、なんだよあのゴキブリ、デュエル終わる前に死んじまったよ」

『まだけっかいとけてない、だぐばいきてる』

「そーかいそーかい、つか結構周りの人間巻き込んだしまったなあ、こりゃ10人前後死んだ奴いるな」

この1人の男の名はゴードン、そしてもう1『台』の名はタップ。信じられない話ではあるがこのタップといわれる存在は熊のような見た目をした怪物である。だが現在はデュエルを行う関係上デュエルディスクへと変貌し声もそのディスクから発せられゴードンはディスクと会話するという第三者から見ればアレな人にしか見えない状態となっている。だがそれ以外にもこの場には目を配るものがあった。

『人』

それも唯の人ではない。全身から血をながした人、手足が明後日の方向を向いた人たちが痛みへの苦痛の声も上げず瓦礫に埋もれているのである。埋もれている人々は紛争地域の少年兵でも軍人でもない、日本で暮らす普通のおばさんや老人ばかりだ。

「しかし相手が契約前のHATEでラッキーだったぜ。楽して1体倒せるんだから」

『おれもううれしい、これでまたあいにちかずいた』

こんな凄惨な光景を他所にこの1人と1台はなに食わないかおで話していた。

「さてと、あのゴキブリをたたき起こすか、サレンダーさせてこのデュエルも終わりにす…」

ドゴオーーーーーー

ゴードンが言い終わる前に突如凄まじい轟音とともに一本の光が天に向かって伸びた。

「な、この光まさか契約の…」

『そのまさかだ』

「ツチ、テメエ」

光の中から一人の少年がでてきた、だがゴードンの台詞を遮った声はどう考えても少年の声ではない。

『さあてデュエルの続きをしようか、フン』

「この声、さっきのゴキブリの声、けど一体奴は…ん？あの餓鬼のディスク…まさか」

光の中から出てきたのは先程のデュエルの衝撃で吹き飛ばされた片腕の少年、虚淵玄だ。ゴードンは虚淵の左側を見た。するとそこには本来あるはずのない腕がデュエルディスクと共にあったのである。そしてさっき自分が戦った怪物、ダグバの声もその腕から発せられていた。

「ハ、ハハハ…成る程、テメエその餓鬼と契約したというわけか…だが例えそんなこととしてもフィールドが空きの今のテメエに何が出来るん…」

「予言してやるよ、あんたはこのデュエル負ける」

「ツア、何のことだ」

「言葉のとおりだ」

「おいおい坊主、あんまり大人をか…」

「負ける…!!」

「ツチ、この餓鬼！下手にでたら調子こきやがって、ぶっ殺すぞ！」

それまでくちを閉じていた虚淵が突然くちを開いた。

「：フン、まあいい、とっととディスクを構えろ、俺は早いところ帰りたいからな」

第四ターン      ・ターンプレイヤー；ダグバ改め虚淵      ・LP；  
3500      ・手札；4枚

『いいか、俺様がさっき言ったようにやるんだぞ、今のお前なら必ずあれを引ける』

「わかってる」

自分の腕もといダグバの声に虚淵冷めた態度で応えた。

「…」

虚淵はデッキの上に手をのせたまま目を閉じた。

side 虚淵

なんだろうこの感じ、こんな不思議な感覚生まれて初めてだ。このデッキの上のカード、見てもいないのに何かわかる、いやわかるんじゃない感じるんだ…

「オイ、とっととカードを引けクソ餓鬼！」

このカードによって俺の未来はきまる。ハ、皮肉なもんだなあ、こんなD O R E Iの産物に未来を決められるなんて…

side 神の目

「俺のターン！ドロオオオ」

虚淵はついに動いた。自分の持つ野望のために…忌まわしき産物と共に…

「魔法カード、《サイクロン》発動！お前のリバースカードを破壊する」

「ツチ、《天罰》が」  
文字通りカードから出現したサイクロンがゴードンのリバーズカードを飲み込んだ。

「さらに魔法カード《死者蘇生》を発動！その効果により墓地の A d r e u s を復活させる。

先程倒された黒い翼の悪魔が再びフィールドに現れた。

「そして最後の魔法発動！《ユニット・チャージ》！」

「《ユニット・チャージ》…だと」

## 《ユニット・チャージ》

### 通常魔法

自分フィールド上に表側表示で存在するエクシーズ素材のないエクシーズモンスター一体と自分の墓地のモンスター一体を選択して発動する。選択したフィールド上のモンスターの下に墓地の選択したモンスターを重ねる。

「A d r e u s のオーバーレイ・ユニットを1つ復活させる」

「ツチ、ガイア・モールを破壊するきか」

『はあ、そんなありきたりのこと俺様たちがするとおもってるのか？』

「何？」

「俺はA d r e u s のオーバーレイ・ユニットを使い手札からこのモンスターを特殊召喚する」

ダグバとゴードンの会話を無視し虚淵は淡々とデュエルを進めていく。すると虚淵の手札の一枚が妙な輝きを放った。ダグバと会話を終えたゴードンはその光にきずいた。その光はは自分にも見覚えがあるものだった。

「あの光…まさか…いやでも俺がガイア・モールを生まれた初めて使ったときもあの光が…」

そういつている間に虚淵の周り段々と不気味な影が覆っていた

「漆黒の闇を支配せし魔王よ、その眼光でセカイを凍てつかせよ」

影がより一層濃く、深くなってきた

「ア…ア……」

ゴードンは絶対の自信をもっていた。だが目の前の『それ』はそれ以上の不安を植えた。一瞬にしてだ。

「来い、《奈落の王 デーモンの召喚》」

彼らのデュエルを眺める人影があった。そこはこの町をすべて見渡すことの出来る展望台だ。彼らのいるところからは大体800mはなれたところにある。

「おやあ、あのとおとおパートナーを見つけたようですねえ☆」  
人影は先程の天に向かって伸びる光をみていた。

「いやあよかったよかった☆あのこプライドが 無駄 にたかいですからねえ☆醜いくせに☆まるでKONMAIですね☆わたしの鼻屑があっても最後まで生き残れるか心配でしたがその心配は いま

はなさそうですね☆」

その人影は誰に語るわけでもなく独り言をただただつぶやいていた。  
「でもこれからおもしろくなるでしょうねえ☆さあ誰が愛を見るの  
やら☆」

「…ア…」

ゴードンは睨まれていた……濁った眼光に……醜惡な赤紫の朽ちた  
身体に……強烈な悪臭に……

「こ　こいつは……」

「《奈落の王　デーモンの召喚》の効果発動、フィールドにいるモ  
ンスターの攻撃力は各々のレベル及びランク×100ポイントアッ  
プする」

「何？」

《奈落の王　デーモンの召喚》　攻撃力2500↓3200

《A d r e u s , K e e p e r      o f   A r m a g e d d o n》  
攻撃力2600↓3100

《インフェルノ・ガイア・モール》　攻撃力2700↓3000

《奈落の王　デーモンの召喚》

効果モンスター

レベル7／闇属性／悪魔族／攻2700／守2100

このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に表側表示で

存在するエクシーズモンスターのエクシーズ素材1つを取り除くことで特殊召喚できる。このカードは罠カードの効果を受けない。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、フィールド上のモンスターの攻撃力は各々のレベル及びランク×100ポイントアップする。

「ガイア・モールの攻撃力を上回った…だと」

「…バトル、デーモンの召喚でガイア・モールを攻撃、ザ・フォーリング・ワールド！」

デーモンが手を翳すとガイア・モールの体がまるでプレス機かけられたかのようにどんどんつぶれていき爆発した。

「ツク、まさか…ガイア・モー…」

「A d r e u sで攻撃！」

「グ　グ　ア　ア　ア　ア　ア　ア」

ゴードン　　・LP；5400↓2100

ゴードンがA d r e u sの攻撃をうけくの字をえがきながら後ろに吹っ飛んだ。

「グ　ゲホ」

『ハッ　いいざまだなあ　フン』

痛みに苦しむゴードンをダグバはあざ笑った。

「…ターンエンド」

第五ターン　　・ターンプレイヤー；ゴードン　　・LP；2100　　・手札；0





突如二つの悲鳴がダグバの耳に入った。ダグバは悲鳴が聞こえた方向を腕を組み仁王立ちをしながらゆっくり首だけを動かしてみた。するとそこには無数の紫色の手や顔に衣類を引き裂かれ目を潰された全身血まみれのゴードンと手足を切断されだるまとかしたタツプの姿があった。

「いゝたあああ いあああああ ああああああ」

あああああああ

「みえないよおおなにもみぎいああああああ」  
「……」

やがてどこから現れたのか、無数の紫色の手や顔が肉片と化したゴードンとタップを直径5、6mほどのどこに通じてるかもわからない穴に引きずり込んだ。

⋮

ダグバ一通り彼らの断末魔をきくと再び虚淵をみた、がそこに別の人影が突然現れた。

「誰だ！」

ダグバがどすのきいた声で放つと

「いやあはでにやったねえ☆」

とずいふんとちやらけた声がきこえた。

「…テメエは」

「久しぶりだねえ☆ダグバ」

### ユウトウ3 決着と悲鳴と新たな影（後書き）

ひさしぶりの投稿となります。すみません、学校の方が忙しくなかなか投稿できませんでした。

# ユウトウ4 Road to The New World(前書き)

今回は説明回です。

## ユウトウ4 Road to The New World

side 神の目

『：昨日、波風第五中学校付近の住宅街で起きた原因不明の爆発に関して警察からは今だ調整中とのコメントしか出されておりません。住民から死傷者をだし…』  
テレビのなかで20代後半の女性アナウンサーが淡々と手元の原稿を読んでいる。

「…ン…」  
テレビの前にはベッドがありそのベッドには片腕のない一人の少年が横になっていた。

「…ン、ここ…は…」  
少年、虚淵玄は目覚めた。

side 虚淵

「…ン、ここ…は…」  
どこなんだここは？それにあの天井…

「知らない、天井だ」  
って、この状況で俺はなにをいつてるんだ。このベッド、この壁、見た感じここは病院みたいだな、つうか何で俺ここにいるんだ、ええっと確かあの時…。

「おやあ☆おきたみたいだねえ☆」  
「!?!」

「警戒する必要はない、この男は敵じゃない」  
おれが声のした方を振り返ると二人の男がいた。

「ああ☆自己紹介がまだだったねえ☆ワタクシはアルフレッド・カーン☆以後お見知りおきお☆」

そう名乗ったは自分の横になっているベッドの左隣の椅子に腰掛け  
ている白髪で英国紳士風の格好をし薔薇の装飾が施された黒いシル  
クハットを手を持ったややぽっちゃり体系の中年の男だ。

「しかしまあ☆英語が通じる子でよかったよ☆そうでないと後々コ  
ミュニケーションが取りずらくなるからねえ☆」

「あんたは…いったいおれに何のようなんだ？」

あやしい、なんだこの男。

「何のよう…かあ…うーん☆」

「ふざけてんのか！」

「あーあそんなおこらないでください、ね☆」

俺が上半身だけを起こして胸倉を掴むと男はあわてて（人を馬鹿に  
したような）謝罪をした。

「くッ」

俺は手をしぶしぶ放した。すると男が胸元をパンパンとはたとと  
男は再び口を開いた。

「コホン、ではまず始めに、おめでとうございます☆本日から正確  
には昨日の午後4時44分44秒からですが君も立派なHATEの  
契約者、という名のパートナーです☆これから君にはいくつもの困  
難が待ち受けているでしょう☆そういったこともあって本日はこれ  
から起こる戦いもといゲームのルール説明をしたいと思います☆」

「…HATE?…ルール、説明？」

「はい☆昨日君はそこにいるHATE、ダグバと契約を結びました  
ね☆」

「そこにいるって…」

俺は右斜めの方角を見るとそこには長身の男が壁に寄りかかりなが  
ら立っていた。この男が…ダグバ？ いやちょっとまって！俺の見たダ  
グバとかいう奴は白黒の怪物だぞ、この中年男の視線の先にはどう  
見ても革ジャン姿の金髪不良少年しかいないぞ。

「…」

「…何だ」

「あ、いやその…お前…本当にダグバなのか？」

「はあ？何いってんだ、お前？、おれh…ああそっか、この姿を見せるのはお前には初めてか」

「?…」

俺が頭に疑問符を浮かべていると突如長身の男の周りを光の渦のようなものが囲んだ。そしてその光の渦がまとしても突如として消え去りなから長身男の代わりに白と黒を基準とした怪物が現れた。

「なあ!?!、これは」

「さっきの姿は人間社会で活動する上での仮の姿だ。この体じゃかなり不便だからな」

そういう終えるとダグバ再び不良少年の姿に戻った。

「…」

「んふ☆ではルール説明を始めたいと思います☆いいかなあ☆」

アルフレッドが何かいってる、ああルール説明かあ。

「ではまず始めに…君はとあるデュエル大会に強制的に参加してもらいます☆」

「大会？」

「そう☆一体のH A T E 1人の人間がチームを組み、他のチームを倒しながら最後の一人になるまで戦う、ま、平たく言うとバトルロワイヤルならぬデュエルロワイヤルです☆」

「デュエル…ロワイヤル？」

最後の最後になるまで戦う…フィクションじみた台詞だなあ。

「そして、最後に生き残ったチームの人間、すなわち契約者にはパートナーであるH A T Eと契約を交わした際、最も強く願ったことを叶える事ができます」

願いが叶う…か、なんだかすげえ中二臭いはなしだなあ…とあのダグバのデュエルを見る前ならおもったんだろうなあ、こんなことを何の疑いもなく受け入れている自分が正直怖い。

「HATEとは彼のような怪物であることは、だいたい話の内容から理解できると思いますが、HATEには其其そのHATEしか持っていないカードがあります☆特に名称は存在しないのですが…ま、HATEのカードとよんでくれればいいでしょう☆」

HATEのカード…あのガイア・モールやデーモンのことかあ…

「そして…HATEと契約者の闘うフィールド結界というものの内部で行われます☆この内部で勝たないと勝ったことにはなりません☆」

「結界って、俺以外の人が動かなくなったアレか？」

「はい☆そしてこの結果いの内部で負けた者は…死にます」

「!？」

死ぬって…オイ冗談だろ、いやでもそうだとしたら

「ってことは、ゴードンは」

「はい☆お亡くなりになりました☆」

「…」

この男は嘘などついていない、そんなことはゴードンがここにいない理由とダグバの表情を考えれば容易にわかることだ。でも死ぬ…かあ。

「随分冷静ですね☆自分が死ぬかもしれないというのに☆」

「…いや、そんなことはない」

アルフレッドはなにか疑いのまなざしを向けたが俺は誤魔化した。

「ま、だいたいオーマカなルールはこんなもんでしょう☆ご理解いただけましたか☆」

「…なるほど、大体わかった」

「そうですかあ☆それはよかった☆」

アルフレッドは満面の（キモい）笑みを浮かべた。

「ただ、2つだけ疑問がある」

「疑問？」

「お前は何者なんだ？そもそもこのデュエルロワイヤルはだれが開いた大会なんだ？」

「ああそれですか☆それは現時点では教えられないんだよね☆ただ教えるべきときにはしっかり教えましょう☆」

「そうか」

「で、もう一つの疑問は☆」

「もう一つは……ダグバ」

「!？」

俺がダグバに向かって若干叫ぶ感じで話しかけるとダグバは首だけ動かして若干驚きながらこっちを見た。

「お前は確か契約の時、愛を見る、とかいってたよな。これからパーティーになる以上それが何なのか話すのが筋なんじゃないのか」

「…」

「オイなんか言ったら…」

「調子に乗るなよ、人間」

「!？」

「俺様はお前を契約者だとは認識しているがパーティーと認識してるわけじゃねえ、お前は俺様の下僕、下僕が主に指示をしてんじゃねえ、俺様に指示をしているのは……ツチ」

ダグバは一瞬なにかを言いかけたがそのまま俺のいる病室を抜け出した。

「何なんだアイツ」

「あんまり気にしないでくでねえ☆あれが通常運転の状態だから☆」  
通常運転？冗談じゃない俺はこれからあんな奴と一緒にいなきゃならないのか。

「午前8時19分、さてそろそろおいたましましょうか☆」

アルフレッドがポケットから出した懐中時計を見てそういった

「ではワタクシはそろそろ帰ります☆治療費などはワタクシが特別に払っておきました☆午後には退院できるので明日からはデュエルに励んでください☆それだは☆」

「ああわかった。ありがとうというのも変だがありがとう」

「いいい…あ！ワタクシとしたことが重要なことをいい忘れていま



した☆」

「…何？」

アルフレッドが椅子のしたにあった自分のバッグをガサゴソと掻き分けているとその中からなにか海外旅行のパンフレットのようなものをとりだした。

「突然ですがあなたにはクロフォード連邦のデュエルアカデミアに入学してもらいます☆」

「…はい？」

## **ユウトウ4 Road to The New World (後書き)**

第4話目です。如何でしたか？

## ユウトウ5 I Wish …

side 神の目

「えーと…あれ？どこいった？」

ここは虚淵の自宅のリビング。自宅といっても一軒やではなく5階建てのどこにでもある普通のマンションである。現在虚淵はハブラシや衣類など手当たり次第に日用品をリュックサックに詰め込んでいる。

「はあ、なんでこんなことに…」

「ぼやいてる暇があったらとっとと準備しろ」

うなだれる虚淵にどすのきいた声で喋ったのは革ジャンをきたどっからどう見てもヤンキーの容姿した男、ダグバだ。

「こんなところにいるよりは、クロフォードにいったほうが早くデュエルロワイヤルに決着をつけることができる。そんなことはわかるだろ」

「ああ、そうだよ…」

「だったら文句を言うな」

『クロフォード連邦』

デュエルモンスターズを中心に発展したいわばデュエルの国である。国内は24のブロックに分かれ、ブロック同士でトーナメントも行うこともある。町の設備や施設もデュエルに関しては、最高レベルの質を誇る。またデュエルだけでなく医療、軍事などの面でも超大国と肩を並べ様々な協力機関が世界のあちこちに存在する。そんなクロフォード連邦に虚淵が行く訳、それは昨日の早朝まで遡る。

とある病院の一角にてベッドに横たわる少年が声を荒げていた。

「お、俺がクロフォードに行くってどういうことだよ!？」

「言葉の通りですよ☆」

突然のことに戸惑う虚淵の質問に中年男、アルフレッド・カーンは何食わぬ顔でこたえた。

「実を言うところのデュエルロワイヤル、元々はごく狭い地域で行う予定でしたんですが、こちらの手違いで一部のHATEがその地域から出て行ってしまったんですよ☆それで当初予定されていたデュエルロワイヤル終了日がだーいぶ延びてしまつてえ☆ははは☆ですからこうしてワタクシが世界中を飛び回って出て行ったHATEを回収しにきているのですよ☆」

虚淵は突然の国内退去命令に戸惑いながらもアルフレッドの話を聴いた。

「そして君の場合、ワタクシがあの子を回収する前にあの子と契約を交わしてしまいました☆契約はHATE1体につき1度しか行えず、やり直しもできません☆ですので君には嫌でもきてもらいますよ☆」

「嫌でもって…おい何だよそれ!聞いてねえぞ、ふざけんなよ!大体クロフォードって他国とは一切貿易をかわしてないんだろ、そんな国にどうやっていくんだよ」

虚淵は声を荒げていった。

「ええ☆それに関しましては大丈夫です☆実はワタクシ、クロフォードの上層部にちょっとした知り合いが降りまして、それで☆」

「知り合い、ねえ」

虚淵は心に何かもやもやしたものを感じながら口を開いた。

「でもちよつとまで、クロフォードは他国との貿易を一切結んでいない、そんな国に行くって事はつまり、俺は公的には拉致被害者扱いになるんだろ?」

「うーん、まあ確かにそうなりますかねえ☆」

アルフレッドは少し考えると間のぬけたこえで答えた。

「…」

虚淵はそんなアルフレッドを呆然とみていた。するとアルフレッドが再び口を開いた。

「ですが別にいいじゃないですか☆」

「どういことだ？」

虚淵は若干どすのきいた声でアルフレッドを睨みながら言った。

「だって君、あんなゴミたちといたって楽しくないでしょう」

虚淵がいる病院が一瞬凍りついた。アルフレッドがいままでのちゃらい態度から一転したのである。

「君について色々調べてきました☆」

「!？」

動揺している虚淵をよそにアルフレッドはバッグから何かの資料のような紙を取り出した。

「虚淵 玄、3歳と10ヶ月の頃に両親の仕事の都合で渡米、6歳の誕生日、仕事で忙しかった両親が君のために休暇を取り、当時君が大好きだったデュエルモンスターズ、その生みの親、ペガサス・J・クロフォードのサイン会に参加すべく君を連れ12社へと足を運んだ☆」

「……ろ」

淡々と紙に書かれた文章を読むアルフレッド、何かを呟く虚淵。

「ですが、その日突如謎の爆発事故が起こりI2社は倒壊、その倒壊によって君の両親は死亡、しかし君は片腕を失うも数少ない生存者となる☆」

「や…ろ」

「その後君は日本に戻るも学校のクラスメイトとも馴染めず毎日をただただ抜け殻のようすごす☆」

「やめろ」

やめろ、虚淵は震える声で確かにそう言った。しかしアルフレッドは喋るのをやめなかった。

「さらにこれは一部君とは関係ないことですがI2社倒壊から3ヶ月、つまり、KONMAIという4流企業にデュエルモンスターズのありとあらゆる権利が移った日を境にデュエルは大きく変わりました☆」

「…」

虚淵は黙り込んだ、しかし彼の拳にはなにやら赤い液体が流れていた。

「大量のパワーカードもとい壊れカードの急激な増加、明らかにテストプレイを行っていないとしか思えないカード毎の強さ及び裁定、大会の上位を独占する似たり寄ったりなデッキ、調整中やカードが違いますなどと客を舐めた社員共の雑な営業スタイル、あの4流企業に全権利が移って以降ろくなことがないです☆」

「……」

虚淵はだんまりを続けた。

「さらにデュエリストたちもデュエリストたちで、そんな企業の連中を崇拝してカードを買い続ける始末ですからねえ☆そして彼らデュエリストはいつしか非デュエリストからこう呼ばれるようになるんですねえ☆」

「……………」

アルフレッドは彼の耳元でこう囁いた。

「D O R E I ☆」

「その後、反KONMAI派が世界各地でKONMAIやそれを崇拜するD O R E Iたちに対してテロ行為を働くもあっけなく駆逐☆このテロには非デュエリストも含めた無差別テロもあり人々の心の中ではデュエルは次第に悪しきものへと変貌していった☆その後、デュエル環境の悪化に伴い競技人口のが激減、終にKONMAIのクズどもはお金だけでもってトンスラしてしまいました☆しかし今日でもデュエリストと非デュエリストとの対立国家単位で続いておりKONMAIの負の遺産のみが残る現実があるのみで…」

「やめろおおおおお！」

虚淵はアルフレッドの資料を勢いよくはじき飛ばしながら今までの怒りを全て吐き出すように叫んだ。たまたま虚淵のいる病室の前を通りかかった看護婦が不安そうな目でみていたが虚淵とアルフレッドは無視した。

「ハアハア」

虚淵は息を荒げながらゆっくりとアルフレッドの方に自分の顔を向け彼を睨みながら吐き捨てるようにこういった。

「これ以上なにか余計なことをいったら、ぶっ殺すぞ!!」

二人の間にしばしの間殺気だった沈黙が訪れた。二人の会話は英語で行われているがその雰囲気から言葉がわからなくとも病室の前で



は看護婦や他の患者が震えながら虚淵たちの様子をうかがっていた。そしてしばらくすると虚淵が怒りが収まったのか若干息は荒いが落ち着いて喋りだした。

「…わかった、たしかにあんたの言うとおりにここにいたって何も変わらない、…だから」

「だから☆」

虚淵は震える声で、しかしはっきりと言った。

「俺をクロフォードに連れて行け」

「よし、準備OKだ」

「チ、いつまで待たせてんだよ」

虚淵がダグバにそう告げると二人は玄関のドアを開け外へ出た。そして自分たちの住む、いや住んでいたマンションから少し離れた公園に向けて歩み始めた。公園の入り口にたどり着くとそこには黒い

スーツを着たボディガードマンと思われる二人の屈強な体つきの男と、英国紳士風の格好をした中年男、アルフレッドが杖を持ってたっていた。そう、ここは昨日アルフレッドと事前に約束していた自分を拉致する場所である。

「覚悟は、できています、よね☆」

「ああ」

短い会話を終え、ダグバとアルフレッド、そして虚淵は黒服の男たちに誘導されあらかじめ用意してあったとおもわれる黒い車に乗った。

「うふ、これから面白くなりますよ☆」

「何か言ったか？」

そうダグバがアルフレッドにたずねると何でもないですよ☆と返事を返した。

「…」

車が走り出した。虚淵は離れ行く自分の住んでいた町を虚ろな目で眺めていた。

これが虚淵玄の『始まり』であった。



## ユウトウ6 学校って必ずウザイ女子、一学年に4、5人いるよなあ？

side 虚淵

『クロフォード連邦』日本でごく普通の中学生をしていた俺、虚淵玄は、とある事情でこの国にいる。この国は平たく言えばデュエルの国、空を飛ぶ飛行機から鼠の糞まで国のありとあらゆるものがデュエルモンスターズと深い繋がりを持っていると言ってもいいほどデュエルのことでいっぱいと言ってもいい（ようは国規模でデュエル脳なのだ、あらゆる揉め事をだいたいデュエルで解決したりする）。この国は24のブロックから構成される国なのだが俺はいまこの国のブロックの1つ、第17ブロックを一人で歩いている。現在のは五月下旬、俺がこの国にきてから一ヶ月がたち近所に住んでいる人たちとも（表面上は）仲良くなりこの生活にもだいぶんじんできた。時刻は午後4時、今俺は夕食の買出しのため街を一人で歩いている。

「にしても学校が始まるまであと数日か」

俺は一ヶ月前まで日本の中学生だった。当然ここにきたとしても俺は学校に行かねばならない身なのだが、ここクロフォード連邦の学校では、（ブロックによって多少違いはあるが）6月上旬から始業式&入学式が始まる。つまり俺は二ヶ月近く学校に行かなくても良いのだ。

「学校…か」

正直いって俺は学校と言うものが嫌いだ。前の学校の連中、とりわけ女子はゴミと言っても罰が当たることのない、むしろ言えば金の延棒をくれたっていいような連中だった。俺も最初は学校に行くことを拒否した。けどアイツ、アルフレッドは…

「だめですよ☆そんなことお☆」

時は一ヶ月前に遡る。俺はアルフレッドと共に車のなかで会話をしていた。

「別にいいだろう、学校なんかいなくなっただてHATEは探せる」

「けどねえ☆学校にいたほうがそれだけHATEやその契約者に会える確立も上がると思うんですよ☆」

「ふざけるな、だいたいアンタだったらクロフォード国内のHATEの位置くらい把握してんじゃないのか！」

俺は若干声を荒げていった。

「それに関してなんですけどねえ、国内には大体3、40くらいいると思うのですがこちらでもその数や詳しい位置は把握していないんですよ☆前にも仰ったように一部が国外に出て行ってしまったもので☆ワタクシも早くロワイヤルを終わらせるため努力をしているのですが☆」

「…」

「そんなに難しい顔しないで下さい☆大丈夫です☆すぐに調べあげますのでそれまでは人の多いところになるべくいてください☆入学の手続きや現地での生活費はこちらで負担しますので☆あ、それとクロフォードはデュエルの国なので国内ではデッキとディスクは肌身離さず持っていたほうがいいですよ☆」

…というわけだ。まったく迷惑なはなしだ…



「……罪……さい」

「あ？なんだって？」

デュエルをしていた少年がイラだった声でいった。

「謝罪しなさい！ 私のデッキを、お父様から授かったデッキを侮辱したことを謝罪しなさい！」

「はあ？名に言っただあの女、自分がどういう状況にいるのかわかってんのか？聴いてらんねえ。」

「シャザイシナサイ、だってよ」

「あははははは」

[illegible]

痩せ型の少年が少女の言葉を復唱するととたんに少年たちに笑いの渦が巻き起こった。それはまるで俺のことを馬鹿にしたあのキチガイ女子生徒三人の……

ツ  
プ  
ツ  
ン

……… ツチ 何なんだよこの苛立ちは、俺はどういうわけかわからないがあの少年たちを見ていると何かがこみ上げてくる。今俺の脳裏にはとある人物の顔が浮かんでいる。イライラする。ああああイ

ライラする、あの猿女どもオオオオオオ

ガシッ

気がつくと俺は近くにあった三輪車を掴んでいた。近くに子供が遊んでいるのが見えるからおそらくその子たちのだろう。

side 神の目

「ウエエエエエエ」

「クッ」

少年たちは痛み苦しむ少女を目の前に絶え間なく猿のような奇声を発していた。だがそんな少年たちの声は突如飛来した『三輪車』によって静まり返った。

ガシヤグアアアアン

少年の一人、痩せ型の少年が鈍い音と共に地面に倒れこんだ。

「うゝうゝうゝうゝうゝ、うゝうゝ」

痩せ型の少年は倒れると同時に顔に手をあてうめき声を上げた。

「お、おいどうした!？」

小太りの少年が数秒遅れて痩せ型の少年の元に駆け寄った。すると目も前には三輪車と一緒に痩せ型の少年のものと思われる前歯が一本落ちており当の痩せ型の少年も口から血を出して呻いていた。

「誰だ?!?!」

デュエルをしていた少年が怒号を発すると以外にも返事は早く帰っ



てきた。

「俺だよ」

デュエルをしていた少年は勢いよう声のした方向を振り返った。そこには片腕のない一人の少年がたっていた。

「てめえなんのつもりだ！？こんなことしておいて唯で済むと…」

「デュエル」

「あ？」

「この国じゃ、大体の揉め事はデュエルで解決するんだろ？」

「テツメエエエ、フ、まあいい、いいだろうそのデュエル受けてやる」

少年は最初こそ怒りの色を見せたが虚淵のデュエルをうけることにした。

「な、なんなんですよ、あの殿方は…」

だいぶ痛みが引いてきたのか少女は上半身だけ起こして虚淵を見ていた。

「俺が勝ったら俺のダチの治療費の10倍の金を払ってもらうぞ」

「ああいいぜ、ただし俺が勝ったらそれはなしだ、いいな」

「いいぜ」

二人の少年がディスクを構えた。ディスクが自動でデッキをシャッフルしはじめた。

「「デュエル」」

第1ターン ・ターンプレイヤー；プルート ・LP；8000

・手札；5枚

「俺のターンドロー、《BF―精鋭のゼピュロス》を召喚、さらに手札の《BF―黒槍のブラスト》はBFが自分フィールドにいれた特殊召喚できる。こい、黒槍のブラスト！」

二体の漆黒翼をもつ鳥人が天を舞う。

「BFデッキ：か」

「そうさ、誰が使っても勝てる、だが俺が使えばパーフェクト！それが俺のデッキだ」

「誰でも勝てる…そんなもんがあるからデュエルやDOREIってのはゴミなんだよ」

「なんかいったか」

「いや別に、早くターンを終わらせてくれないか」

プルートは眉をひそめながらもデュエルを続けた。

「さああて、ここからが俺の本領発揮だ！」

プルートが高らかにそう叫んだ。

「見るがいい、俺のデッキの真の姿をオオオ！」

**ユウトウ6 学校って必ずウザイ女子、一学年に4, 5人いるよなあ？（後書き**

なんとかデュエルを描くところまで行きました。やっぱりデュエルがないとだめですよねえ。

## ユウトウ7 野球部員は総じてクズ（前書き）

今回から「ターンプレイヤー」の表記を「TP」で統一します。

## ユウトウ7 野球部員は総じてクズ

side 神の目

とある街の一角にてデュエルは行われていた。

「俺はレベル4の精鋭のゼピュロスと黒槍のブラストをオーバーレイ！エクシーズ召喚！現れろ《BF―黒金のダーク・インパルス》」

《BF―黒金のダーク・インパルス》

効果モンスター

ランク4 闇属性 鳥獣族 攻1600 守1300

「BF」と名のつくレベル4モンスター×2

このカードの攻撃力はこのカードを除くフィールド上に表側表示で存在する「BF」と名のつくモンスターの数×700ポイントアップする。また1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材1つを取り除くことで発動できる。デッキからカードを1枚ドロウする。この効果で「BF」と名のつくモンスターをドロウした時、そのモンスターを特殊召喚することができる。

黒き刀身を持つサーベルを携えた猛禽の戦士が現れた。

「《BF―黒金のダーク・インパルス》の効果発動！オーバーレイユニットを1つ使い、デッキからカードを1枚ドロウ！」

「…」

高らかに叫ぶプルートを虚淵は唯静かに見ている。

「おおおおしやああああああ！俺はドローした《BF―蒼炎のシュラ》を特殊召喚！」

蒼い羽毛を持つ鳥人が天を舞った。

「そして黒金のダーク・インパルスの攻撃力は蒼炎のシュラが現れたことにより700ポイントアップする」

《BF―黒金のダーク・インパルス》 攻1600↓2300

「俺はこれでターンエンドだ。さあて、後何ターン後にてめえはやられるのかなあ、あはははははははは！」

プルートは先行1ターン目を終えただけだ。にもかかわらずその脳裏には自分が勝利するイメージしか浮かんでないのだ。自分の腕に相当の自身を持っているのだろう。

「…」

「どうした？負けるのが怖いのか？だったら男らしく負けを認めろんだなあ。そうすりゃ恥の上塗りはしなくてすむぜ」

何も言わずただただだんまりをきめこむ虚淵にプルートは挑発をしてきた。

「あははははははははははははははは、やっぱ俺天さああああい」  
自分の世界に入ってしまったのかプルートにはもう虚淵の事など眼中にない、そんな顔をしている。

「あははははははははははははははは」  
何時にもまして大きくなる笑い声、だがそんな声を遮断するような一言が次の瞬間放たれた。それはプルートを、いやこの国にとって最も忌まわしき一言…。

「いつまでもキチガイごっこなんかやってねえで目え覚ませよ、糞DOR EI」



「俺のターン、ドロ」

「（チツ：なんなんだよアイツ）」

プルートは冷静さをようやく取り戻しデュエルに集中した。

「魔法カード《炎熱伝導場》を発動。デッキから《ラヴァルのマグマ砲兵》と《ラヴァル火山の侍女》を墓地に送る」

デュエルディスクは本来左腕の肘から下に取り付けるのが一般的である。だが虚淵の場合そこに該当する箇所はない。そのため虚淵のデュエルディスクは肘から上の部分に取り付けられるよう独自の形をしている。クロフォードはデュエルの国、デュエルディスクやデッキは身分証明書のような役割（法律で決まっているわけではなくあくまでもものの例えレベル）を果たす。いざとなればデュエルディスクに姿を変えられるダグバがいるとはいえ、自分専用のデュエルディスクは携帯すべきなのである。

「さらに墓地に炎火山の侍女が送られたことにより、デッキから別の炎火山の侍女2枚とマグマ砲兵1体を墓地に送る」

「（一気に5枚のカードを?）」

「あの殿方、どういともりですか?」

「さらにもう1枚魔法カード《真炎の爆発》を発動。墓地のモンスターを全て復活させる」

「何イ!？」

驚くプルートを他所に虚淵のフィールドには一気に5体のモンスターが並んだ。

「くっ、モンスターが…5体も」

「さらに2組の炎火山の侍女とマグマ砲兵をそれぞれシンクロ素材とし、《TG－ハイパー・ライブラリアン》と《A・O・J カタストル》をシンクロ召喚」

「な…シンクロモンスターが一気に2体!？」



「ハイパー・ライブラリアンの効果発動。シンクロモンスターのシンクロ召喚に成功したときデッキからカードを1枚ドロ―する」  
驚くプルートを他所に虚淵は淡々とデュエルを進める。

「手札を一枚捨て手札から《THE トリッキー》を特殊召喚。さらに《ダークロン》を通常召喚。《ダークロン》の効果発動。このカードが召喚に成功した時、自分フィールド上のモンスターのレベルを1つ上げる」

《ダークロン》 レベル1↓2

《ラヴァル炎火山の侍女》 レベル1↓2

《THE トリッキー》 レベル5↓6

《TG―ハイパー・ライブラリアン》 レベル5↓6

《A・O・J カタストル》 レベル5↓6

炎火山の侍女を除く全ての虚淵のモンスターがわずか一瞬にして入れ替わった。

「レベル2の《ダークロン》にレベル2の炎火山の侍女をチューニング、シンクロ召喚、現れる《アームズ・エイド》ハイパー・ライブラリアンの効果によりカードを1枚ドロ―」

「チッ：何時まで続くんだよ」

文句を言うプルート。だが虚淵は手を休ませない。

「レベル5のトリッキーとハイパー・ライブラリアンをオーバーレイ、エクシーズ召喚、現れる《マジマジ☆マジシャンギャル》」

黒衣を身にまとった女性魔術師が桃色の魔法陣と共に現れた。

「マジマジ：マジシャンギャル：だと!？」

プルートはこの時いやな予感を覚えた。《マジマジ☆マジシャンギャル》には相手モンスター1体のコントロールをエンドフェイズまで奪う効果がある。ついさっきまで余裕と苛立ちの表情を見せていたプルートの表情が一変した。

「おい待て、まさかお前俺のモンスターを奪って…1ターンキルを

…」

「…」

「どうなんだよ！え！？答えろよお」

取り乱すプルート、『1ターンキル』1ターンで決着をつけるつもりなんだとプルートは悟った。

「じよ…冗談じゃあねええ、俺が負ける！？ありえない！しかも1キルで、こんな奴にイ、ふざけんなよおお！俺は前の大会じゃベスト4だったんだぞオオオ！」

「…」

取り乱すプルートをしばらくの間虚淵は可哀想なものを見るような目で見ていたそして…。

「オーバーレイユニット1つを使い、手札1枚を除外し《マジマジ☆マジシャンギヤル》の効果発動…」

「ハッ！」

虚淵の言葉にようやくわれに返ったのかフィールド見た…。だがそこにはすでに自分を睨む蒼炎のシユラの姿があった。

「あ…そんな」

「レベル4の《アームズ・エイド》と蒼炎のシユラをオーバーレイ、エクシーズ召喚、現れろ《ジェムナイト・パール》」

蒼炎のシユラは機械の腕と共に光の中に消えると、そこにはまったくべつのモンスターが現れた。

「蒼炎のシユラが消えたことにより黒金のダーク・インパルスの攻撃力は下がる」

《BF―黒金のダーク・インパルス》 攻2300↓1600

「な！？」

「さらに魔法カード《死者蘇生》を発動。墓地のハイパー・ライブラリアンを復活させる。バトル。《ジェムナイト・パール》で黒金のダーク・インパルスを攻撃」

《ジェムナイト・パール》 攻2600

《BF―黒金のダーク・インパルス》 攻1600

パールの突きが決まるとダーク・インパルスはくの字を描きながら後方に吹っ飛んだ。

プルート ・LP；8000↓7000

「グアアア」

プルートは苦しみの声を上げるがそんなプルートを無視して後方に立っていた3体のモンスターが襲い掛かる。

「あ…ああああ」

「これで終わりだ」

《マジマジ☆マジシャンギャル》 攻2400

《A・O・J カタストル》 攻2200

《TG―ハイパー・ライブラリアン》 攻2400

プルート ・LP；7000↓0

「うああああああああああああああああああ」

プルートの体が大きく仰け反り地面に転がった。

「…」

うめき声を上げるプルート、虚淵はそんなプルートを横目でみていた。

「す…すごい」

地べたに座り込んでいた少女は虚淵の勝利にただただ驚いていた。とそんなふうに驚いていると虚淵がこの場を立ち去ろうとしようとしているのが目に飛び込んできた。

「…あ、あの」

少女は痛みの残る体を無理やり起こし虚淵に駆け寄った。だが次の瞬間…。

「無効だ！」

突如倒れていたプルートの足をふらつかせながら立ち上がり言い放った。あまりに突然な出来事だったので少女は思わず足を止めてしまった。

「無効？　どういうことだ」

「今のはデッキがよく切れてなかった。マッチ戦なら俺が勝っていた」

この男は自分が負けたことに納得がいていないのだ。

「あ、あなた、いくら負けたからといって」

「うるせえええ、10連敗はだまってるおお！」

「うっ」

痛いところをつかれ思わず少女を後ろにさがった。

「とにかくマッチだマッチ、あと2回勝てば俺の勝ちだ！」

「…」

何かに取り付かれたように叫んだプルート。2人の間にしばらくの間沈黙が訪れたがその沈黙を破ったのは以外にも虚淵だった。

「マッチ…ねえ」

虚淵はゆっくりとズボンのポケットに手を入れながらプルートに歩み寄った。

「そうだマッチなら、らあああ、ぐじゅああああ、ああ」

何かを言いかけたプルートを虚淵はポケットにしまっていたナックルダスターを右手に付け、そのナックルダスターを付けた右手でプルートの頬を思いつきり殴打した。

「ぐあ」

ドサッ、という音をたてプルートの体が数m先で倒れた。

「調子に乗んなよお糞DORÉI」

泡を吐きながら痙攣するプルートに対し吐き捨てるように言う。虚淵はこの場を去ろうとした。

「…え」

一瞬の出来事に困惑する少女。だが虚淵がこの場を立ち去ろうとしているのを見てようやく我に返った。

「あ、あの」

少女の声に虚淵は首だけ振り返った。

「あ、あの…えっと」

虚淵の目に立てロールのかかった長く奇麗な金髪と透き通るような水色の瞳、地面の汚れで多少汚れているが雪のように白い肌をもつ少女がなにやらもじもじしながらたっていた。

「ん？アンタ確か」

すると虚淵が口を開いた。

「えっと…私…」

「アイツに10連敗した…」

その瞬間少女の膝がカクッ、というギャグ漫画のような音をたて折れ曲がった

「い、痛い所をそんなにズバツと言わないで下さい！」

少女は涙目になりながら顔を近づけて抗議した。

「え！？ああ、あ、ああわるい」

あまりに急な出来事だったので虚淵は訳はわからないがとりあえず謝った。

「…ぷん」

少女はと言うと腰に手をあて頬を膨らませていた。

「…ああ、えっと」

めんどくさいことになったなあと思いながらとりあえず少女に何か言おうとした。が、虚淵が何かを言う前に少女が口を開いた。

「あ、そうでしたわ。私としたことがつい忘れてしまいましたわ。

あの、どなたか存じ上げませんが先程は誠にありがとうございますございました」

「ああ、え？先程のこと？」

「はい、先程は私を助けて頂いて…」

「ああ、あれか。別に俺アンタを助けるためにやったわけじゃあ」

「事情がどうであれ結果的に助けていただきました。そこで何かお礼をしたいのですが…」

「ああお礼とかそういうのいいから、じゃ俺そろそろいかないと…」  
そういつてその場を立ち去ろうとしたが…。

「お待ちください」

そういつて少女は虚淵の行く手を遮った。虚淵は若干少女に対して苛立ちを覚えた。

「だから、お礼とかそういうのいいって…」

「では…では、せめて名前だけでも」

「…な、名前？」

「むむむむ」

少女は虚淵をじっと見つめた。あーたぶんこれは言うまでどかないなあと思った虚淵はしぶしぶ答えた。

「虚淵だ。虚淵<sup>うろぶちけん</sup>玄」

「虚淵…玄」

「もういいだろ。じゃあn」

「お待ちください」

「まだあんのかよ!」

虚淵が声を荒げて言うのと少女は若干涙目になったがすぐに口を開いた。

「今度は…今度は私が名乗らせていただきます」

「いやだかr」

「私の名は…」

少女は胸を張り続けた。

「…ルル・ルルーシュと申します」

午後6時10分、虚淵は帰宅した。

「はー、たくとんだ1日だったぜ」

虚淵は食材でいっぱいになった買い物袋を片手に今日1日の出来事をぼやいていた。

「随分と遅い帰りだったなあ」

そう言ったのはリビングでテレビを見ていた虚淵の同居（怪）人、

ダグバだ。

「うるせえな、別にH A T Eは飯なんて食わなかったて死にやしねえんだからいいだろう」

「そういういみじゃねえ、お前に何かあると俺様が困るんでなあ」

「あーはいはいそうですかあ」

一通りダグバと会話すると虚淵は夕食の準備に取り掛かった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5140x/>

---

遊☆戯☆王F

2011年12月20日16時52分発行